

# 住民の「住み続ける」を支える

「これからも住み続けたい」多くの住民の正直な気持ち、切実な思いです。当該地での生活復興のバネとなるのが、生活への「見通し」です。ボランティア活動を通して気づいたのが「海とのかかわり」「畑とのかかわり」「山とのかかわり」「先祖とのかかわり」が住民の見通しの重要な要素だということです。加えて、住民同士が対話を重ねることで、自分の中での漠然とした思いが「ここで暮らす」という言葉の中に再確認され、「ここで暮らす」という思いは一層強くなります。

## バラ園 ～交流と対話を重ねるための 住民のサードプレイス～

プライベートな庭でありながら、仮設住宅で暮らす住民、在宅で生活する住民を問わず、誰もが気軽に立ち寄り、くつろぎ、これからのことを気軽に話すことのできるパブリックな場として、バラ園は地震以降特に重要な役割を担っています。地域の未来を話し合う場は、集会所や公民館に限られているわけではありません。住民がくつろぎ、これからのことを話し合うサードプレイスの一つがバラ園です。北陸学院大学はここで「青空カフェ」や「ローズガーデン・コンサート」を開催してきました。住民同士がつながり、未来を話し合う場としてのバラ園を、住民と共に創っていきます。



## 海とのかかわり 生活復興の重要な要素

海底隆起し以前のような海との関わりが困難となったことで、それまで当たり前であった海との関わり、海とのつながりがいかに住民にとって重要であり、暮らしの重要な一部となっていることに住民自身が気づきました。生活の見通しを持つうえで、海との関わりをどう再生するかはたいへん重要な課題です。そんな海との関わりを取り戻すため、地震と豪雨で漂着した流木や金属などを取り除きました。海岸の清掃には大学生だけでなく住民も参加し、2025年3月末の活動では2日間で延べ200人近くが汗を流しました。おかげで海岸線は見違えるほどきれいになりました。



地震の後、岩のりの道具をすべて廃棄したはずの住民が、海に向き岩のりを摘み取っていました。海は確実に再生しているし、岩のりを摘み取った住民の顔は誇らしげでした。のりを黙々と摘み取るその姿が「ここで暮らす」というメッセージを強烈に発信しています。



## 畑とのかかわり

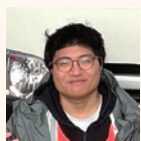


「ジャガイモが待ってくれない」豪雨で泥や流木、大量の石に埋まった畑を見つめながら、住民がつぶやいた言葉です。野菜はいつでも作付けすればよいというものではなく、最適な時期があり、これを逃せば立派に育たない。ジャガイモの作付けが始まる3月中旬までに畑を元の状態にする。目標を掲げた学生らは雨、雪、風が吹きつける極寒の中、畑の再生プロジェクトを継続しました。行政が考える復旧・復興の優先順位と住民の考える復旧・復興の優先順位は異なります。その典型が畑の再生です。住民が「ここで暮らす」という見通しを持つためには、より早く畑を取り戻すことが重要だということを感じさせてくれたのがジャガイモでした。



学生  
の声

### もっとボランティアに興味を持って欲しい



望月 勇吾さん  
北陸学院大学  
社会学科 2年

能登豪雨における被害地域の家屋の泥出しでは、狭い床下での泥出しは肉体的にとてつらい作業でしたが、その場にいたボランティアの方々と協力することで効率的に作業が進みました。活動を通して全体的に人手が不足しているので、もっとボランティアに興味を持って欲しいです。

学生  
の声

### 子ども達と大学生が関わりを持つことが大切



市谷 美桜さん  
北陸学院大学  
子ども教育学科 4年

輪島の子供達と一緒に能登島水族館へお出かけをしたことが印象に残っています。子ども達と沢山お話をしたり、一緒に園内を楽しく散歩することができ、子ども達と大学生が関わりを持つことや、子どもがのびのびと過ごせる環境と一緒に作ることが大切だと感じました。

## 復興・再生に 向けて

未だ見通しが持てず不安な毎日を過ごしている住民が数多くいます。住民一人ひとりが見通しを持ち、「ここで暮らす」を確信するために、地元大学や大学生が取り組めることはあるはず。それが何かをつかみ取るためには、まず集落を訪れ、住民に会い、話を聞き、住民が暮らしを重ねてきた場所を五感で感じることから始まります。目の前にいるひとりの復興を支える。ボランティアに必要な視点です。

# R6年 能登半島地震 北陸学院大学の取り組み



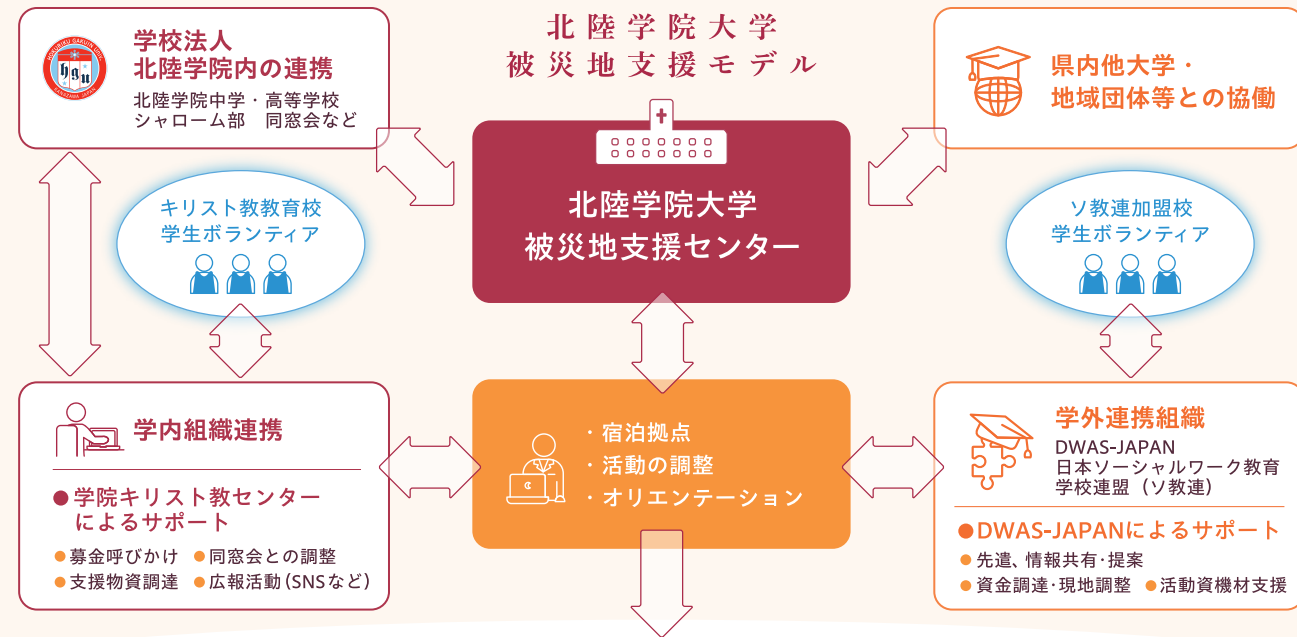
## オモイをカタチに

地震と豪雨。2024年の二重の自然災害は穏やかに暮らす能登の住民の日常を容赦なく奪いました。変わり果てた大好きな能登の光景に愕然としながらも、「ほっとけない」「いてもたってもいられない」という衝動に突き動かされ、「自分に何ができるのか」を自分に問いかけ、「これでいいのか？」と模索し続けながら、能登に足を運び続けた一年を振り返ります。



# 全国の大学生と被災地を繋ぐハブ機能を担う 北陸学院大学被災地支援センター

全国の大学生と能登を繋ぐ機能を担うため、北陸学院大学被災地支援センターを立ち上げました。今後は同センターを中心に、学生ボランティアの募集、移動手段の確保、宿泊調整などを行い、継続して現地ニーズに応じる体制づくりを進めていきます。また、学内の施設の一部を支援物資保管拠点及び一時休息拠点として開放、県外大学生らの経済的負担の軽減及び被災地への移動をサポートします。



## 現地ボランティア活動へ!!

「能登の力になりたい」「ほっとけない」地震発生直後から学生の声が続切れることはありませんでした。

学生の思いを形にするための課題が「移動手段の確保」「宿泊拠点の整備」「支援の帯を絶やさない」の3つでした。

### 移動手段の確保

災害当初課題になったのは移動手段の確保でした。北陸学院大学では日本ソーシャル教育学校連盟から移動用車両に加え、家具の運び出しや荷物の移動用の軽トラック4台の支援を受けました。



現地で大活躍した4台の軽トラック「あ号」「い号」「う号」「え号」



支援物資、資機材、学生を載せ金沢と奥能登を100回以上往復しました。

### 宿泊拠点の整備

キャンパス内にあるライザー記念館を宿泊拠点として開放。県外から参加する多くの大学生がここで滞在し能登に向かいました。内灘教会、羽咋教会では、被災地に向かうとする学生を支援しようと、県外大学生を受け入れていただきました。



羽咋教会 富来伝道所



ライザー記念館

### 支援の帯を絶やさない

全国のキリスト教教育校および日本ソーシャルワーク学校連盟加盟校から数多くの大学生、教職員が東北、関東、関西、九州各地から支援に駆けつけてくれました。本学の卒業生、高校生と保護者も加わった「ごちゃまぜチーム」で現地へと向かいました。



「夏ボラ」メンバー

## つながり支援

仮設団地の集会所が十分機能していない時期、住民交流促進を目的に団地内にベンチを設置しました。ベンチがあるだけで皆が部屋から出てきて、腰かけ、会話を始めます。仮設住宅の住民と在宅住民が誰でも気軽に集える場所づくりとして、私設バラ園でカフェを開催しました。住民同士、学生と住民とのあいだの弾む会話がバラ園のあちこちから聞こえてきました。



## 仮設住宅の生活支援

同窓会及びキリスト教センターの協力と支援によって、短期間のうちにたくさんの衣類、毛布、シルバーカーなどが大学に集まり、必要とする住民に迅速に届けることができました。また、冬季の仮設団地玄関周りでの転倒防止のため、2024年12月には門前町道下仮設団地のすべての居宅前、階段、スロープに「藁こも」を敷き詰めました。転倒事故抑制につながり、住民から喜ばれました。



## R6年度に行ったプロジェクト

# 2024 Activity Report



## 煙の再生

復旧復興計画を考えると行政の優先順位と住民の優先順位が必ずしも一致しているわけではありません。その一つが煙です。復旧のお手伝いしながら気づいたのは、住民が生活の見通しを立てるうえで重要な要素の一つが煙だということです。2024年9月の豪雨被害によって煙に流入した土砂、石、流木を翌月から取り除き始めました。煙が元の状態に戻るに従い、住民の声の張りが大きくなり、顔つきが穏やかになっていったのを忘れません。



## ローズガーデン・コンサート

住民が集い、住み慣れた地域に思いを寄せる機会を作りたい。2024年10月にバラ園で開催した「ローズガーデン・コンサート」には250人を超える地域住民が集まり、オーケストラアンサンブル金沢、エンジェルコーラス、北陸学院大学ハンドベルクワイアの演奏に耳を傾けました。唱歌「ふるさと」を合唱した際には、涙を浮かべる住民の姿もありました。参加した一人ひとりが住み慣れた自分たちのふるさとへ思いを重ねる時間となりました。

## 写真洗浄

津波被害を受けた能登町で、津波被害を受けた写真の洗浄ボランティアに取り組みました。写真洗浄のニーズは当初局所的でしたが、9月の豪雨以降、写真洗浄の依頼・相談件数が各地で増えました。持ち主からお預かりした写真をキャンパスに持ち帰った学生は、空きコマを利用して洗浄作業を行い、順次持ち主に返却しています。



## 子ども支援

地震と豪雨は児童が集団で思い切り遊ぶ機会と場所を奪いました。北陸学院大学ではNPOや保護者と連携し、1日遠足、体を使った遊び教室の支援を継続しています。

